

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書
(2年9ヶ月計画の3年度目)

1. 研究課題

(和文) 生命知創成に向けたプラットフォームの構築

(英文) A platform for creating new wisdom on life

2. 研究代表者

(氏名) 小林 傳司

3. 研究期間

平成 22年 7月 から 平成 25年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

現代の科学が社会的に強力な威力を発揮する巨大な営みであることは間違いない。しかしこのような構造が生まれたのは20世紀であり、とりわけ1970年頃からは生物学が生命科学として巨大化したことに注目したい。実験室に閉じたかたちで営まれていた自然哲学的色彩を伴う生物学から、医学領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具体的な影響を持つ生命科学への展開は、現代もなお昂進している。今求められているのは、このような科学の構造転換の状況において、生命科学を社会の中にあらためて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として把握しなおすことであると考え。本研究提案では、このような社会的視野と見識を備えた生命の科学に関する新しい捉え方を「生命知」と呼ぶこととし、その創出のために、科学者、社会学者、人類学者、哲学者、歴史学者などによるプラットフォームを構築することを目指す。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

昨年度から引き続き、生命科学の研究者と人文系の研究者との情報共有を行うことを目指し、5回の研究会を開催した。第1回は公開とし、また第5回研究会では、生命科学の研究現場を知ることが目的に、理化学研究所発生・再生科学総合研究センターで研究会を開催、研究所見学も行った。

以下は、各研究会の報告者と発表テーマである。

平成24年7月2日 第1回研究会 (公開) 櫛島 次郎 (東京財団、自治医科大学客員)

研究報告「脳科学に何を求めるべきか ～研究の倫理と、科学と社会の関係について考える —『精神を切る手術』岩波書店、2012/5より—」

平成24年9月17日 第2回研究会 近藤 滋 (大阪大学大学院 生命機能研究科)

研究報告「動物の体のパターン形成」

平成24年10月15日 第3回研究会 中辻 憲夫 (京都大学 物質-細胞統合システム拠点)

研究報告「日本と科学の厳しい現状と問題点、そして科学者が果たすべき役割」

平成24年11月19日 第4回研究会 見上 公一（総合研究大学院大学 学融合推進センター）

研究報告「再生医療という文化：STSの視点から」

平成24年12月20日 第5回研究会

(1) 研究所見学

(2) 研究報告 上田 泰己（理化学研究所・発生再生科学総合研究センター）「合成生物学によるライフ・イノベーション—『細胞を創る』から『個体を創る』へ—」

独立行政法人理化学研究所 神戸研究所 発生・再生科学総合研究センター（理研CDB）にて

6. 研究成果の概要（400字程度）

総計5回の研究会を行い、生命科学系、人文系の両方の立場からの報告を聞いた。昨年度までの研究会と合わせ、総計13回の研究会を通し、1970年代から現在に至る生命科学の変遷についていくつかのことが明らかになった、

第一に、ゲノム研究を端緒とするE L S I（倫理的、法的、社会的課題）への対応という問題は、再生医療はもちろんのこと、合成生物学、脳科学などを含む生命科学全体に及ぶものとなっており、研究成果の公表に関してもデュアルユース問題などが浮上している状況が明らかになった。第二に、生命科学の先端研究の現状についてより認識を深めることができたことがある。生命科学の研究現場では、数学や物理学、工学などの、これまでになかった分野との交流や共同研究が本格的に行われ、個別生命現象の理解は進んでいる。その一方で、「生命らしさ」の解明を含む、生命現象の本質に迫るには、いまだ研究者は試行錯誤していることも明らかになった。第三に、1970年代が生物学から生命科学への転換点であったというわれわれの認識は、ほぼ歴史的にも確証され、同時の多様な可能性の中で、日本ではそれがバランスよく発展してこなかったという問題を把握できた。そして、現在、生命科学の研究者自身が自らの研究が生み出す倫理的・社会的課題に取り組もうという動きがあることも明らかになった。

以上、本年度を含む3年間を通して、生命科学系の現場にいる人々と人文系の研究者がともに検討するという当初の目的はある程度達成できたと言える。今後は、この活動を踏まえてさらに多様な研究者、専門家、その他の人々が参加できる場を作ることを計画している。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

【公開セミナー・シンポジウム】

平成24年7月2日 第1回研究会（公開） 櫛島 次郎（東京財団、自治医科大学客員）

研究報告「脳科学に何を求めるべきか ～研究の倫理と、科学と社会の関係について考える —『精神を切る手術』岩波書店、2012/5より—」

【配布用冊子】

人文研アカデミー 特別セミナー「ライフサイエンスの半世紀 —歴史を振り返り現在を考える」記録集

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数	
		外国人	大学院生	外国人	大学院生
学内（法人内）	1	5	5	10	5
国立大学	4	10	5	28	5
公立大学	1	1		1	
私立大学	3	3		8	
大学共同利用機関法人					
独立行政法人等公的研究機関	1	1		1	
民間機関	1	1		1	
外国機関					
その他	1	1		2	
計	12	22	10	51	10

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	2	
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の（ ）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。
 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由			
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名